

要旨

アンディニ・リズカ. 2016. 『樁の下のスマレ』の短編小説にある動詞の意味分析、格文法理論. ブラウウィジャヤ大学日本語学科.

指導者: アジ・ステイヤント

キーワード: 生成文法、格文法理論、ケーススタディ、動詞。

言語学の文法の中には、様々な文法スタディがある、例えば格文法である。Charles J. Fillmore (1968) は、始めて格文法理論を紹介した。格文法は生成文法にある研究である。格文法は、文の中で動詞と名詞がどのような意味的な関係にあるかを示す。Fillmore (1968)の格文法では様々なケースの種類がある。例えば、ケースのリストは動作主 (Agent)、経験格 (Experience)、道具格 (Instrument)、受益者格 (Benefactive)、対象格 (Objective)、ソース格 (Source)、結果格 (Goal)、場所 (Locative)、時間格 (Time)、随格 (Comitative)、作為格 (Faktitif)にわけられる。文章の全体の意味は動詞にある、ケースを決定するには動詞が必要である。本研究で、動詞は意味的なので特性に基づきます。すなわち状態動詞、過程動詞、動作動詞、動作-過程動詞です。動詞の短編小説のなかではどのような分類があるのか、何のケースが現れるのかを分析した。

本研究では、定性の記述という研究方法で分析した。データのソースは『樁の下のスマレ』という短編小説を使用した。文章の動詞分析はケースの種類によって決定した。

本研究の結果として 42 のデータがあり、そのデータには 20 の状態動詞、4 の過程動詞、14 の動作動詞、4 の動作-過程動詞があった、その動詞の決定基準は意味と文型を見ればわかる。そして、11 種類のケースには 8 種類のケースがあり、そのデータは 6 の動作主、9 の経験格、3 の受益者格、8 の対象格、2 の結果格、6 の場所 (位置) 格、1 の随格、と 7 の時間格があった。本研究は、Fillmore の基本的な格文法理論を使用したため、今後の課題はほかの理論を使えると考える。例えば、Cook の理論や Chafe の理論である。